Fieldingの内なる声を求めて

── Battestinのインセスト説再考 ──

南　井　正　廣

I

1989年に出版された，Martin C. Battestinの*Henry Fielding: A Life*は，従来Fielding研究者たちの知的拠り所とされてきた，Crossの伝記（1918）やDuddenの伝記（1952）を凌ぐ力作である．新たに発見され，検討を加えられたFielding関係の書簡の数が，従来知られている数の約3倍に達するということ，Fieldingが寄稿していた41篇に及ぶ*Craftsman*の原稿の発見や，Fieldingの親友James Harrisによって執筆された未刊行の評伝が資料に加えられている点，さらには，古文書類の調査の専門家である妻の協力のもとに，集められた膨大な公文書類が考察の対象になっている点からも，Battestinの用意周到な仕事ぶりが推察される．このように充実した資料に基づいて分析する際に，心理学や社会史に関する最新の文献が視野に収められていることも見逃すべきでないだろう．1978年に，*Henry Fielding: A Biography*を上梓したPat Rogers自身の，"this [Battestin's work] is not just the fullest life we have ever had, but all round the most accurate, the most purposeful, and the most solidly supported by a deep knowledge of Fielding's own writings."[1]という評価そのものが，Battestinの伝記の出来ばえを保証していると言っても過言ではあるまい．

このBattestinの伝記の中で，どの書評者も触れずにおれないほど，激しい衝撃と驚きを，読者に提供してくれている論考がある．Fieldingが，incestを犯していたという指摘である．例えば，目下James Harrisの伝記を

執筆中の Clive Probyn は，"we knew about the literary cooperation of Henry and his sister Sarah, but that their childhood included a possibly incestous connexion is the most startling."[2] と，素直な感想を洩らしているし，欧米のある Fielding 研究者の狼狽ぶりは，日本の学会誌において，以下のように紹介されている．

> 相撲取りのような赤ら顔のずんぐりしたこの学者 (Battestin) は，この一夕を興奮の渦に巻き込んだものである．私も触発されて，質問しようと挙手したところ，突然立ち上がった一人が，'I have an urgent question!' と叫んだ．司会の Clark 博士は，とめどもない質問の連続をここで打ち切ってしまった．外に出ると夜の大気は冷たかった．後から出てきた一人が私に話しかけてきて，「Fielding が incest を犯したなんて!」と吐き捨てるように言ったものである．[3]

厳密に言えば，この記事は Battestin が1987年の Hilary Term に Oxford に来て講義を行なった時の様子を描いている．その時彼は Fielding 伝の執筆途上であり，その仕上げのためにロンドン入りしたところ，依頼されて講義することになったらしい．Fielding に関する最新の研究成果が発表され，それが彼の incest を証明する内容だったのだから，聴いていた研究者たちが受けた衝撃の大きさは想像に難くない．

当然のことながら，Battestin の投げかけた波紋の大きさに比例して強い反発が生じる．純粋に学術的な論争を睨んだものであれ，自分の研究している作家に「清く正しく」あって欲しいという願いからであれ，Battestin の解釈に異論を差し挟む声も大きくなる．先述の Pat Rogers は，Battestin の Fielding 伝を絶賛しながらも，この incest については，"As for the incest scare, it is certainly under-argued here and ought not to have been given so much attention in a book otherwise careful in weighing facts and disinclined to speculate."[4] となかなか手厳しい．が，よく考えてみれば，20世紀

生まれの作家ならともかく，1707年生まれの Fielding が幼い妹に incest まがいのいたづらをしたのかどうか，また，彼と妹 Sarah とが incest の関係にあったのかどうかといった問題を，客観的な証拠を揃えて科学的に論証するとなるとなかなか難しい．ここでは，伝記作者 Battestin が，あらゆる内的外的証拠を駆使して一つの結論に到達していると考えるべきなのであろう．そして，この答えの見えない問題に敢えて取り組んだ彼の勇気を称賛するだけに止めるべきなのであろう．しかし，この称賛と彼の解釈を全面的に認めることとは，アカデミックな意味では別問題であるべきであろう．Pat Rogers の指摘しているように，議論に不備があるのは確かである．

小論では，Battestin の論証を全面的に受け入れることも，すべてに異を唱えることもしない．彼が提示している，ある証拠を別の観点から眺め直すことによって，彼の解釈を補強し，Fielding が incest を犯していたという事実が立証できないまでも，Fielding と incest の問題に関して最大限どこまでのことが言いえるのかを，明らかにすることを目的としておきたい．

II

まず，Pat Rogers の評言を出発点にして，Battestin の論証で用いられている証拠類の検討から始めよう．彼がここで問題視しているのは，Battestin の事実の扱い方に慎重さが欠けるということと，彼が推理推論に頼りすぎていることである．が，250年以上前に生きていた人間の全く個人的な伝記的事実を提供してくれるような証拠が，今だに残っているのだろうか．

Battestin の採用している証拠の中で唯一事実と言えるのは，Fielding が幼年時代を過ごした East Stour で子守女中をしていた Frances Barber による法廷証言である．この証言がなされた背景には，複雑な人間関係と込み入った事情が存在しているので，Fielding の実母 Sarah が亡くなった直後の East Stour の状況を見ておきたい[5]．Fieldingの父 Edmund は，Sarah が病気の時，ロンドンに滞在していて自堕落な生活を送っていた．彼は，妻が死

ぬと，子供たちを Fielding の大伯母にあたる Mrs. Cottington に預け，自分はロンドンに居て新しい妻を娶る．さらに，悪いことに，Edmund との結婚に反対していた Sarah の父が，Sarah のために残した農場，Sarah の死後は子供たちのために保管人が委託管理するべき農場からの収入をいつまでも受領し続ける始末．ついに，業を煮やした Sarah の母 Lady Gould は，孫たちの養育権の獲得と，その財産保全のために，訴え出ることになる．

Mrs. Barber は，その裁判に Edmund 側の証人として出席し，"[Henry] . . . was guilty of committing some indecent actions with his sister Beatrice." (23) と証言している．Battestin はこの証言に基づいて，12歳になるかならぬかの Henry 少年が 4 歳半の妹に，"some sort of shocking erotic experimentation" (23) を行なったのだと断定している．果たして，そこまでたいそうな話だろうか．仮にそういう事実があったにしても，母親不在の複雑な家庭環境から生じるストレスの鬱積，あるいは愛情の不足のために，兄が幼い妹に少し悪質ないたづらをしたというレベルの話であって，これを incest に直結させることには賛成しがたい．また，この法廷論争をめぐって，使用人までもが二手に分かれて証言の応酬を繰り返す．妻に先立たれてすぐに再婚した放蕩者の夫と，亡妻の母親とが，子供の養育権を錦の御旗にして，金と土地を奪い合うという，まさしく泥試合の様相を呈してくる．Battestin 自身も証人たちの証言に関して，"none of it [evidence] is wholly disinterested, and . . . much of it, consequently, is contradictory." (21) とコメントしている程なのだから．おまけに，Mrs. Barber の証言を注意深く検討してみると，Fielding が妹に性的ないたづらをした時に，彼を甘やかす大伯母 (Mrs. Cottington) は，甥を叱るどころか，けしかけているように思えるという証言が付帯していることが判明する (23)．ここまでくると，Mrs. Barber の攻撃目標が Mrs. Cottington だという読み方も成立する．彼女が Henry の養育者として如何に不適格であるのかを実証するために，Mrs. Barber が Fielding の不埒な行為を捏造した可能性だってないわけではな

い．ひょっとしたら，一つ屋根の下で一緒に暮らしていた二人の女性の間に，何らかの確執があったのかもしれない．いずれにせよ，Mrs. Barberの証言を鵜呑みにするのは危険――これだけは確かなようだ．

Mrs. Barberの証言以外の証拠は，いずれもFieldingの作品から導き出された内的証拠といえる．*Joseph Andrews*（1742）の中の，JosephとFannyが結婚する寸前，二人が兄妹であることが判明する場面や，*Tom Jones*（1749）において，投獄されて悲嘆に暮れているTomが，Uptonの旅宿で一夜を過ごした女性(Mrs.Waters)が彼の実母だったことを知らされて奈落の底へ突き落とされるような思いをする場面が，とりわけ有名である．Battestinも指摘しているように，Fieldingが小説家になる前に作っていた*The Wedding-day*（1730，上演は1743），*The Coffee-House Politician*（1730）においてもこのモチーフが用いられている（25）．登場回数の多さから判断して，Fieldingが何らかの強迫観念に襲われていたとまでは言えないにしろ，incestというテーマにかなり執着していたことは否定できない．しかし，その理由をFielding自身の問題に短絡的に帰することには，首肯できない．Fieldingが自分の小説に伝記的要素を注入していることは確かである．例えば，Samuel Richardsonは，"Tom Jones is Fielding himself, hardened in some places, softened in others . . . . Booth, in his last piece, again himself . . . ."[6]という感想を洩らしているし，Fielding自身，自分が描くのは「人間性」であり，(*Tom Jones*, I, 1)，「経験」，「いろいろな人との交際」(*Tom Jones*, XIII, 1)がその作業を遂行させる重要な要素の一つであると宣言していることからも，彼の実体験重視型の創作態度は窺い知れる．だが，登場人物のモデル探し程度の話と違って，incestのような個人的な問題を作品の中から抽出するとなると，どこまでが事実でどこまでが創作なのかほとんど見分けがつかない．

Fieldingが，incestのモチーフに執着した原因を，彼がincestを犯していたという事実に帰着させる考え方には，ある疑念が付きまとう．F.

Holmes Dudden によれば[7]，登場人物の心中に描く際に，Fielding は Richardson のような "the minute psychological analysis" を行なおうとはしない．"the conflict between avarice and conscience in the heart of Black George" という表現に見られるように，字句だけで済ませてしまう傾向がある．これは，客観的な視点で創作することを強いられてきた劇作家時代の名残であろう．この劇作からの影響は，彼のプロット展開術にも見られる．心理描写をしないのだから，登場人物に葛藤を与える手段として，また，プロットを複雑化させるテクニックとして，たえず事件を作り続けねば物語をうまく展開させることができなくなる．*Joseph Andrews* においても，*Tom Jones* においても終盤の肝心な部分で，主人公に苦を与え読者を驚かせるために，incest という大仕掛を導入しているという考え方が十分に成り立ちうるのだ．*Amelia*（1751）以外の作品における incest の扱い方が，深刻なものではなく，"mannered, almost gratuitously frivolous way"[8] であるという指摘も，Fielding がプロット展開の技法として incest を導入していると考えれば納得がいくであろう．

Fielding が真面目な態度で incest を扱った唯一の小説として，Battestin は，*Amelia* に言及している．Booth と臨終の床にあった姉 Nancy とのエピソードは，現代の心理学的知識に基づいた精密な解釈がなされていて，確かに読み物としてはおもしろい．しかし，この箇所は，*Tom Jones* や *Joseph Andrews* と違って，誰の眼にもはっきりと，incest と理解できるような場面にはなってない．この場面に何らかの意味があるとすれば，やはり，Booth と Amelia が結婚するまでに起こった波乱の一つであり，深読みをしない読者がそこから感じ取るのは Booth の善良さであろう．この Nancy の死があまりにも唐突な形で導入されていることの背後には，*Amelia* 出版の前年に Fielding が 3 人の妹を失ったという事実が潜んでいるような気がする[9]．Nancy を埋葬したごとく，自分のかわいい妹たちを作品の中に埋め込んだと考える方が自然ではないだろうか．また Booth と Nancy との関係が，セ

ンチメンタルで深刻な印象を読者に与えているということから，*Tom Jones* と *Amelia* のそれぞれを支配するトーンの違いにも注目すべきであろう．全体的に暗い，シリアスな雰囲気の漂う作品の中で，あるエピソードのみが軽々しく，からかい半分に導入されることなどありえない．

Battestin が上記の他に導入している証拠は，Lawrence Stone の *The Family, Sex, and Marriage in England 1500—1800* からの引用で，17～18世紀においては，総じて家が狭いうえに子供の数が多かったので，部屋を共有することが多く，兄弟姉妹の関係がとくに密接で，incest はごくありふれたものだったにちがいないという主旨である[10]．これは，同時代の家庭の状況に関する一般論に過ぎず，Fielding の私的問題にはつながらない．あくまでも状況証拠の域を出ないものであろう．

以上の検討から総括すると，Fielding の incest を明示する直接的な証拠は，Mrs. Barber の証言のみで，その証言も絶対に信用がおける性質のものとは言いがたい．Fielding が劇や小説の中で，incest のモチーフを多用しているという事実は揺るぎないものであるが，この事実の扱いが難しい．彼の incest への強い関心の現れと読むこともできるが，プロットを活性化させるためのテクニックとして incest 事件を利用したという解釈にも，無視しがたい合理性が感じられる．それだけでもって，Fielding が incest に対して強い罪悪感を抱いていたと断定することなど到底できない．プロットや特定のコンテクストから離れたところで，Fielding が自己表明を試みているような証拠はないのだろうか．

Ⅲ

実は，*Henry Fielding: A Life* を出版する11年前に，Battestin は，"Henry Fielding, Sarah Fielding, and 'the dreadful Sin of Incest'" という論文を発表している．今回の伝記で展開されている Fielding の incest に関する論考が，この論文の焼き直しであることは，Battestin 自身も認めている (23 *n*)．

が，すべてが同じという訳でない．新しい Fielding 伝では，論証をさらに強化するために，重要な証拠が持ち出されている．まず，それを見てみよう．Fielding の "Part of Juvenal's Sixth SATIRE, Modernized in BURLESQUE VERSE" からの引用である．

> However liberal your Grants,
> Still what her Neighbour hath she wants! . . .
> Or what Agrippa gave his Sister,
> Incestuous Bribe! for which he kiss'd her.
> (Sure with less Sin a Jew might dine,
> If hungry, on a Herd of Swine.) (25)

Battestin は，さらに，"the frivolous allusion to Berenice, daughter of the king of Judah, who lived with her brother Agrippa — a sin, Fielding flippantly remarks in a parenthesis, about as serious as a Jew's eating pork." (25) というコメントを，この引用に付している．Fielding が，*incest* の問題を宗教上の掟と同列化させて，「心の罪」の問題として扱っているというのがその主旨であろう．この引用文の特徴は，小説や劇から導き出された証拠と違って，プロットに無関係という点にある．詳細は後述するが，このバーレスク詩自体が女性攻撃を主眼としたエピソードの羅列を中心とするものであるから，incest を "sin" だと表明したところで，登場人物が苦しむとか，筋が複雑化されるという結果にはつながらない．Battestin は，Fielding の "fascination with the theme of incest in his plays and novels" (24) に関する検討の最後の所で，この引用文を紹介している．いわば，切り札的存在となる証拠として．

しかしながら，この "Juvenal's Sixth Satire Modernized" からの引用は，取り扱いを慎重にしないと，墓穴を掘ることになる．タイトルが示しているように，この作品はローマの詩人 Juvenal の第 6 諷刺の18世紀版である．女

性攻撃という主旨は同じであるにせよ，舞台をローマから18世紀のイギリスに置き換えているため，また，バーレスク的な色彩が強いため，1693年にDryden が出版したようなほぼ正確な翻訳であるとは考えられない．が，Juvenal の原詩を無視して新しいものを作り上げているとも言いがたい．左のページに Juvenal の原文を配し，対称をなすような形で右のページに自分の詩を配置していることからもわかるように，Juvenal の原詩を相当意識していたことになる．詩の内容に関しても，Juvenal が次々に繰りだすエピソードを，うまく咀嚼して同時代のイギリスで見られる光景に映し換えている．従って，翻案と言ってしまうよりは，少し滑稽な形にモダナイズされた翻訳として扱う方が賢明であろう．となると，もし Juvenal 自身が原詩において，「incest は“sin”である」と書き記していたら，Fielding は原詩を忠実に訳しただけになり，incest に関する見解も Fielding の声でなくなってしまう．つまり，この証拠は，両刃の剣になる可能性を秘めているのだ．

さっそく，Juvenal の原詩を眺めることにしよう．これからの議論の出発点となるので，日本語訳も付けておく．

Grandia tolluntur crystallina, maxima rursus
Myrrhina, deinde adamas notissimus, et Berenices
In digito factus pretiosior: hunc dedit olim
Barbarus incestæ; dedit hunc Agrippa sorori;
Observant ubi festa mero pede sabbata reges,
Et vetus indulget senibus clementia porcis.[11]

大きな水晶の壺や，非常に大きな蛍石の器が，さらに，ベレニケーの指にはめられて一層値打ちがでた，ダイヤモンドが（買われて）運び込まれた．このダイヤはかつて蛮人の男が近親相姦者の妹に与えた代物．つまり，アグリッパが妹に与えたのだ．その国では王たちは素足で安息日

の祭りを行ない，昔からの寛容のおかげで老いた豚がやさしく取り扱われているのだ．

（訳および傍線は筆者）

原詩は，アグリッパが incest を犯していた妹にダイヤを与えるという出来事が，「王たちが素足で安息日を祭り，豚を食せぬ国（ユダ王国）」で生じたという内容になっている．つまり，関係副詞 "ubi" が "incest" の事実と傍線部分（incest が起こった国に関する内容説明）とを，結びつける働きしているだけで，incest を善悪の問題にする姿勢は一切見られない．ということは，Fielding がこの部分をねじ曲げたことを意味し，Battestin の引用の妥当性が証明されたことになる．しかしながら，もし，Battestin がラテン語の原詩を添えて，incest に関する証拠として比較検討していれば，一層説得力が増していたであろう．この見解が支持を得るためには，Fielding がねじ曲げを行なったプロセスを一瞥しておく必要がある．

Ⅳ

Fielding が Juvenal の原詩をねじ曲げた経緯を究明することは大変な作業ではあろうが，挑戦してみる価値はある．うまくいけば，ねじ曲げた結果が Fielding の見解であるという次元を跳び越えて，Fielding の心の声が聞こえてくるかもしれないからだ．Fielding は "Juvenal's Sixth Satire Modernized" において，相当数のねじ曲げを行なっているので，そのすべてを仔細に論じるわけにはいかないが，大半は固有名詞の置き換えである．例えば，堅物の修辞学者 Quintilian の代わりに，Lyttleton や Pitt を持ち出したり，ギリシャ語に浮かれていたローマ女性の堕落ぶりを描く場面では，ギリシャ語をフランス語に置き換えたりしている．英国式に置き換えたり，新たに加えられた英国式の固有名詞（固有名詞に由来する形容詞，動詞）の総数は全体で61にも及ぶ．この置き換えこそがこの作品の齎らす笑いの原動力になっ

ているのである．それ以外のねじ曲げとは，時と場合に応じた拡大と圧縮．つまり，ラテン詩を英訳すると語形変化の関係で，膨張の一途をたどることになるので，なるべく原詩の主旨に沿った形で，折々に拡大したり圧縮したりしているのである．一例を挙げると，

Quippe aliter tunc orbe novo, cœloque recerti
Vivebant homines; qui rupto robore nati,
Compositique luto nullos habuere parentes.[12]

確かに，その当時，世界は若かったし，空も新しかった．人々は（今とは）違った生活をしていた．その人たちは引き裂かれた樫の木から生まれたり，土からできていて，親は持たなかった．（訳は筆者）

Fielding は，"We have here varied a little from the original, and put the two Causes of Generation together."[13] という注をつけて，この部分を以下のように4行に脹らましている．

For, in the Infancy of Nature,
Man was a diff'rent sort of Creature;
When Dirt-engender'd Offspring broke
From the ripe Womb of Mother Oak.[14]

内容の検討に入る前に，詩行の増減についてコメントしたい．Juvenal の第6諷刺は全体で661行にも及び，16ある諷刺の中で最も長い作品で，Fielding はこの長詩の300行目の途中までをモダナイズしている．それでも，"Juvenal's Sixth Satire Modernized"は，行数にして1.5倍にあたる450行に脹らんでいる．ラテン語には語形変化がたくさんあるので，英語より少ない行数で，より多くの内容を伝えることができるのは言うまでもない．Dryden の場合を目安として紹介しておこう．ラテン詩の1行は大体英語の

1行半の分量に相当する．それで，彼は先人の訳やら注釈を参考にして，1行半を2行に，4行を5行に，という調子で盛んに拡大させたらしい.[15] Fielding も Dryden にならって，3行を4行にしている．しかし，少し奇妙なことが起こっている．E. Courtney の注釈によれば,[16] 最初の人間が木から生まれたという伝説がローマにはいくつかあったらしい．その際 Vergil をはじめとして，樫の木がしばしば言及されている．粘土から作られたことに関しては，Prometheus が言い出したことらしい．いずれの場合にしろ，Juvenal が強調しているのは，人間が堕落する元凶となる親というものの不在といえる．これに対して，Fieldingは「樫の木の母の子宮から，土から生まれた子が出てきた」というような具合に，二つの伝説を合体させて人類の誕生を描写している．おそらく，原詩を忠実に訳せば行数が増えすぎる恐れがあるので，一つにまとめた．にもかかわらず，4行に脹らんでしまったということであろう．Fielding の作品においては，「親の不在」ははっきりと明示されていないものの，意味的には原詩と大きな違いはないようだ．

Fielding が incest に関してねじ曲げを行なった箇所に関して言えば，該当箇所の8行分のラテン詩は，きちんと8行に収まっている．意味的にも，8行中6行までがモダナイズされてはいるものの，ほぼ同じ主旨の内容となっている．問題は，残りの2行である．Fielding が括弧付きにまでして，意味をねじ曲げた2行が，どのような経過で生まれてきたのかということになる．

議論をより有益なものするために，Juvenal の第6諷刺のテーマを把握しておく必要がある．この諷刺のテーマに関する批評家たちの意見は四分五裂していて収拾が着かぬ状況である.[17] が，本稿は第6諷刺の作品研究ではないのだから，「昔のような貞淑さ，たしなみ，誠実さを喪失した女性を攻撃する詩」と少々強引ながら大雑把にまとめてしまっても差し支えないであろう．

このテーマを頭に入れて，Battestin の Fielding 伝を繙いてみよう．該当

箇所――「Agrippa なる男が Berenice なる女と incest を行なうために彼女を誘惑する物品を与えた．そのおかげで，彼は Berenice にキスした」――を見れば，読者は，ここで非難の対象となっているのは，物品をもらって incest をした女性 Berenice であると即断することであろう．女性の堕落は即ち incest であると考えたくなるのは不自然ではない．しかしながら，Berenice はユダ王国の女性であってローマの女性ではない．この部分を Juvenal の原詩のコンテクストを考慮して読み直してみる．該当箇所の直前で Juvenal が諷刺しているのは，美貌を売り物にする女性が，有頂天になって，牧場や葡萄園を買ってくれとせがんだり，自分用の奴隷をたくさん欲しがったり，隣人の所有物をなんでも欲しがっていることなのだ．Juvenal が非難の対象にしているのは，そうした強欲な女性であり，Agrippa が Berenice に与えたダイヤモンドも美しい女性のために購入される物品の一つということになる．つまり，かつて Berenice が所有していて値が上がった舶来の宝石を，貪欲な女が欲しがったということが言いたいのであって，Berenice と Agrippa の incest はダイヤモンドにまつわる因縁に過ぎないのだ．

この見解は，“incestæ” という語を分析することで，さらに強固なものとなる．注目すべきなのは，第 6 諷刺の156行目から157行目にかけての部分――“hunc dedit olim/Barbarus incestæ; dedit hunc Agrippa sorori（これをかつて蛮人の男が近親相姦をしている女に与えた，つまりアグリッパが妹に与えた）”――である．“barbarus” は “Agrippa” を指示し，“incestæ” と “sorori” は “Berenice” を指示する語と考えてよい．ラテン語では，名詞や代名詞の代わりに，その人物の属性や動作を表わす形容詞や分詞を用いることが多い．この文脈においても，Berenice のことが 3 行の中で 3 回述べられているので，詩人としては，重複を避けるという技巧の面からも韻律の面からも,[18] Berenice の与格形である “Berenicæ” を使用する訳にはいかないのだ．そこで，Juvenal は “incestæ（近親相姦をした女に）” という語と “sorori（妹に）” という語を使っている．

ところで，この Berenice という人物であるが，Pierre Bayle の『歴史批評辞典』(1734，フランスでの初版は1697年）によると，五項目が記載されている．一項目には，大まかなこと（Berenice がギリシャ系の名前であることやアフリカなどにある都市の名前であること）が記されている．二番目には，異例にもオリンピックのコーチ役を務めたギリシャの女性のことが，三番目には，エジプト王 Ptolemy Auletes の娘，クーデターを起こして父王に逆らった女性のことが説明されている．四番目は，ユダヤの Herod 大王の姉妹の娘，そして，最後に紹介されているのが，ユダヤの王 Agrippa の娘，夫の Uncle Herod の死後，兄の Agrippa（父と兄は同名）と incest を犯したと言われている，問題の Berenice である.[19] この最後の Berenice は四番目の Berenice の孫娘に当たるのだから話がややこしい．Bayle は註でそれ以外にも同名で名の知れた女性が3人いたと記している.[20] Bayle 自身が，"Great mistakes have been committed to this Princess." とか，"*The Juvenal Variorum*（様々な学者が註解を施した刊本）contains many Mistakes in relation to Berenice."[21] と述べていることからもわかるように，ここに登場する Berenice や Agrippa（Berenice の父と兄の名が共に Agrippa で，Berenice は父の兄弟である Herod と結婚し，夫の死後 incest を犯したらしい）は古来注釈者泣かせであった．Juvenal にしても Berenice が何人もいることぐらいは承知していたはずである．しかし，incest を犯した Berenice といえば確実に一人に限定できるので，彼は自分が意図している Berenice を他の Berenice と区別するためのメルクマールとして，その属性を表わす "incestæ" を名詞相当語として用いたのではないか．

このように考えると，Juvenal にすれば，美貌を鼻に掛けて何でも欲しがる女性を攻撃するという文脈で，その女性が手に入れたダイヤモンドの曰くを説明するための，識別符号として "incestæ" を使用したに過ぎない．コンテクストから言えば，何ら道徳的意図のない無色透明な，代名詞に近い形容詞に対して，Fielding は過剰に反応し，括弧付きとはいえ，心の罪の問題

にまで昇華させてしまったことになる.

V

こうまでして，ねじ曲げのプロセスをたどってきたのは，ある目的があってのことだ．Battestinの論考は探偵小説的で推理としては興味深いが，「たら，れば」式の条件を付ける必要のある，状況証拠を基盤にして成り立っているように思える．彼の見事な論証を成立させるためには，Fieldingがincestというものを過剰に意識していた本物の証拠を示すしかない．その意味で，"Juvenal's Sixth Satire Modernized"に見いだされる「incestが"sin"である」という言い方をどう理解するかがキーポイントとなる．この表現が，Fieldingの創作であると安易に信じ込むのは間違いである．既に言及したように，それはJuvenalの何気ない"incestæ"を道徳的問題へと転化したものに過ぎなかった．つまり，訳出の過程で生じたねじ曲げであることを知っておくべきなのだ．この意味においてであれば，Fieldingのincestへの執着は，コンテクストから離れた純粋な形で，抽出することが可能となるであろう．

この執着心をFieldingの強い自己表明であると理解すべき理由はまだ他にある．"Juvenal's Sixth Satire Modernized"という作品が出版された経緯を調べてみれば，明らかである．この作品は，1743年の*Miscellanies, by Henry Fielding, Esq;*の第1巻に他の詩やエッセイと共に収められている．その序文で，Fielding自身がこの作品の誕生した経過を，"It was originally sketched out before I was Twenty, and was all the Revenge taken by an injured Lover."[22]と語っている．この発言を信じるならば，1727年以前に書かれたことになり，*Love in Several Masques*（1728）よりなお古く，現存する最も初期の作品と見做すことができる．1725年頃，彼はLyme Regisの町でSarah Andrewとの恋が挫折した腹いせに，Juvenalの第6諷刺の現代版を作ったらしい（51）[23]．長らく，未完成のまま放置されていたその習作を，

1743年の *Miscellanies* に掲載できるように，加筆修正した（このことは，Richardson の *Pamela*（1740）の名が作品の中に現われていることからも証明される）のである．つまり，Fielding 版の第 6 諷刺は（Modernizing も含む広い意味での）“translating” と “rewriting” という二つのプロセスを経て，日の目を見ることになったのだ．これら二つの作業は，それぞれに Fielding の意思表示としての機能を持つ．何故ならば，彼には，その両段階で Juvenal の原詩を Dryden のように忠実に訳すチャンスも，ねじ曲げたものを元に戻すという選択も可能であったはずだから．残念ながら，習作段階のオリジナル版は現存しないので，20歳前の Fielding が incest にどのような見解を保持していたのかはわからない．しかし，その段階でねじ曲げが行なわれていなかったのであれば，Fielding は35歳頃までに incest を過剰に意識し始めたと読めるだろうし，習作段階からねじ曲げが行なわれていたのであれば，妹に対する「性的ないたづら」が尾を引いて，（Sarah との関係があったにせよなかったにせよ）「incest は罪悪」という考えがずっと彼の脳裏にあったという読み方もできよう．要するに，チェックする機会が二度あったのに，Fielding は incest に拘泥した態度を取り続けたことになる．

もちろん，これまでに抽出した Fielding の incest を否定する強い気持ちを，Battestin が最新の Fielding 伝で採用している，ややあいまいな証拠群に重ね合わせてみても，Fielding が incest を犯していた可能性は示唆できても，それを実証することは不可能であろう．ただ，彼が自らの文学作品の中でこのモチーフを多用していることや，プロットに無関係なコンテクストで，“incestæ” をねじ曲げて道徳問題にしていることから判断すると，incest に対する反感，あるいは何らかの決意，あるいはその双方の裏に潜んでいる精神的動揺のようなものが見えるような気がしてならない．

注

1 Pat Rogers, "Review of *Henry Fielding: A Life,* by Martin C. Battestin, with Ruthe R. Battestin," *Notes & Queries* (Dec., 1990), 474.

2 Clive Probyn, "Review of *Henry Fielding: A Life,* by Martin C. Battestin, with Ruthe R. Battestin," *The Modern Language Review,* 86 (1991), 402.

3 増淵正史「Martin C. Battestin, with Ruthe R. Battestin, *Henry Fielding: A Life*」([書評])『日本ジョンソン協会年報』第15号 (5,1991), 29.

4 Pat Rogers, 474.

5 以下の状況説明は, Martin C. Battestin, *Henry Fielding: A Life* (London: Routledge,1989), pp. 22–30 を参考にした. 以後この伝記を *Life* と略記し, そこからの引用はその直後の括弧内にページ数のみを記す.

6 Samuel Richardson, "To Anne Donnellan" 22 Feb. 1752, in *Selected Letters of Samuel Richardson,* ed. John Carroll (Oxford: Clarendon Press, 1964), p. 197.

7 F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times,* Ⅱ (Oxford: Clarendon Press, 1952), p. 1097.

8 Martin C. Battestin, "Henry Fielding, Sarah Fielding, and 'the dreadful Sin of Incest,'" *Novel: A Forum on Fiction,* 13 (1979), 15. 後述するが, この論文が *Life* における論証の下敷きになっている.

9 *Ibid.,* 16–17. Battestin がここで述べているこの重要な事実を *Life* で言及していないことに関しては, 納得がいかない.

10 Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500–1800,* abridged and revised edition (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1979), p. 309.

11 Juvenalis, *Satyra Sexta,* 154–159, in Henry Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq;* Vol. 1, "Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding" (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1972), p. 102.

12 Juvenalis, 11–13. in Henry Fielding, p. 84 and p. 86.

13 Henry Fielding, p. 87 n.

14 *Ibid.,* p. 85 and p. 87.

15 A. B. Chambers, "The Translations of Juvenal and Persius," in Vol. Ⅳ of *The Works of John Dryden* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974), p. 591.

16 E. Courtney, *A Commentary on the Satires of Juvenal* (London: Athlone Press, 1980), p. 263.

17 Juvenal の第6諷刺のテーマに関する論考の主なものを年代順に取り上げると, 以下のようになる. Gilbert Highet が, "It [the Sixth Satire] is a satire on mar-

riage: it is a denunciation of wives, and particularly of rich wives." (*Juvenal the Satirist: A Study*, [Oxford: Clarendon Press, 1954], p. 91) と述べているのに対し, William S. Anderson は,「女性が *Pudicitia* (貞潔) を喪失したことおよびその原因」がテーマであると指摘している ("Juvenal 6: A Problem in Structure," *Classical Philology*, LI [1956], 73–94). 他に,「上流の女性が卑しい男たちと交わることへの非難」(Peter Green, "Introduction" to *Juvenal: Sixteen Satires* [Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1967], p. 25) やら,「既婚女性への攻撃」(Michael Coffey, *Roman Satire* [London: Methuen, 1976], p. 127), さらに「女性としての本分を失い, 堕落したローマの女性」(Felicity A. Nussbaum, *The Brink of All We Hate: English Satires on Women, 1660–1750* [Lexington, Kentucky: University Press of Kentucky, 1984], pp. 77–78) などがあって, 大同小異であるとはいえ各人の意見が分かれている.

18 "incestæ" の行は六歩格であり, 次のように韻を踏む.

Barbaru | s inces | tæ; dedi | t hunc Ag | rippa so | rori;

"incestæ" の位置に, "Berenice" の与格である "Berenicæ" を入れると, "Barbarus" の"u" が長母音化されて六歩格が崩れてしまう.

19 Pierre Bayle, *The Dictionary Historical and Critical of Mr Peter Bayle*, Revised, Corrected, and Enlarged by Des Maizeaux, (London: J. J. and P. Knapton, 1734; reprint, New York: Garland) Ⅰ, 761–769.

20 *Ibid.*, Ⅰ, 768 n.

21 *Ibid.*, Ⅰ, 768 n.

22 Henry Fielding, "Preface" in *Miscellanies*, p. 3.

23 他に, F. Homes Dudden (Ⅰ, 19.), Donald Thomas (*Henry Fielding*, [London: Weidenfeld Nicolson, 1990], p. 44), Wilbur L. Cross (*The History of Henry Fielding*, [New Haven: Yale University Press, 1918; reprint, New York: Russell & Russell, 1963], Ⅰ, 52) においても, 同じ主旨の指摘が見られる.